神女大国文 論文総目録（創刊号～第三十号）

創刊号（一九九〇年三月）

創刊のことば　石原　清志
洛陽誓願寺縁起考　石原　清志
萍風子の韻鏡研究　福永　静哉

第二号（一九九一年三月）

美的性格を有する「なさけ」の用法の展開
―平安時代の仮名文学作品を中心に―　上野　辰義
中世歌論の変容　石原　清志
新古今時代の哀傷歌(1)
―後鳥羽院尾張哀傷歌群を中心に―　藤平　泉
近松秋江
〝子供への愛〟ものをめぐって　小久保　伍
「聖婚」再考　鈴鹿千代乃

第三号（一九九二年三月）

新古今時代の哀傷歌(2)
―慈円との十首歌贈答―　藤平　泉
徒然草に見る兼好の仏教観　石原　清志
『枕草子』における連体形準体法
―構文的な特質を中心に―　信太　知子
『九暦』における「御覧」　柏谷　嘉弘

第四号（一九九三年三月）

「霞」題歌の変遷(2)
―「霞の底」「霞の奥」の消失―　藤平　泉
三五記考　石原　清志
宴曲を読む(二)
―『宴曲集』巻一、「春野遊」―　伊藤　正義

第五号（一九九四年三月）

『土左日記』の正月行事
―「屠蘇・白散」をめぐって―　北山　円正
三五記考（続）　石原　清志
宴曲を読む(三)
―『宴曲集』巻一、「花」―　伊藤　正義
季吟と無端　榎坂　浩尚
『白氏文集』巻第三・第四の日本漢語の語彙表　柏谷　嘉弘

第六号（一九九五年三月）

『宝治百首』流行の表現　藤平　泉
三五記（鷺本末）長高体考　石原　清志
宴曲を読む(四)

―『宴曲集』巻一、「夏」―　伊藤　正義
『風土記』の「御覧」　柏谷　嘉弘
近世後期の連体形準体法
―上方洒落本を中心に―　信太　知子

第七号（一九九六年三月）
石原清志教授退職記念号

献辞
三五記長高体付和歌考　榎坂　浩尚
藤原基俊生年考　石原　清志
『最勝四天王院障子和歌』伝本考　北山　円正
木戸孝範『自讃歌注』加注の視点　安井　明子
―「感情をしる」―
新古今時代の哀傷歌（3）
―美福門院加賀哀傷歌と源氏物語―
宴曲を読む㈤　藤平　泉
―『宴曲集』巻一、「郭公」―
桂葉・少蝶と季吟　伊藤　正義
「故郷」から「人間嫌ひ」へ　榎坂　浩尚
―白鳥作品の一面―
文選読　小久保　伍
古代語連体形の構成する句の特質　柏谷　嘉弘
―準体句を中心に句相互の関連性について―
『和漢朗詠集』複製本目録稿　中川　順子

第八号（一九九七年三月）

『新古今和歌集』八〇一番歌について　藤平　泉
―「むせぶもうれし」の意味するもの―
『誹諧埋木』の成立とその変貌　榎坂　浩尚
大名と和歌　吉相　慶子
―田村建顕を中心に―
『和漢朗詠集』複製本目録稿（前号）訂正・補足　中川　順子

第九号（一九九八年三月）
小久保伍教授退職記念号

献辞　榎坂　浩尚
山城國風土記逸文「伊奈利社」小考　河田千代乃
―「伊奈利」は「伊禰奈利」か―
菅原定義生年考　北山　円正
―『更級日記』の「せうとなる人」をめぐって―
伊勢路を行く季吟　榎坂　浩尚
旅の行方　濱川　勝彦
―『旅愁』論（三）
白氏文集の音注　柏谷　嘉弘
「である」から「ぢゃ」へ　信太　知子
―断定の助動詞の分離型と融合型―

『和漢朗詠集』戊辰切について
—神戸女子大学図書館所蔵複製本紹介—　中川　順子
『芥舟草』翻刻—春夏の部—　吉相　慶子

第十号（一九九九年三月）

黄山谷の詩追考
「懸車」と生年
—平兼盛・明快の場合—　石原　清志
建永元年七月『和歌所当座歌合』前後
素謡京観世続貂
—井上治郎右衛門家を中心に—　北山　円正
『心中宵庚申』考
—そのイメージ追及を軸に—　藤平　泉
〈悲壮〉をめぐる断章
—鷗外における美学概念精製の軌跡—　大谷　節子
川端康成「反橋」小考
上野本『平家物語百二十句本』の日本漢語の語彙表（上）　倉本　優子
翻刻『和漢朗詠集』（戊辰切）続　青田　寿美
『芥舟草』翻刻（承前）　河野　育子

第十一号（二〇〇〇年三月）

大江匡衡「除夜作」とその周辺　柏谷　嘉弘
貧道集について　中川　順子
『源平盛衰記』伝本考
—出典注記・人物注記の検討を通して—　黒田　彰子
『小敦盛』研究
—須磨寺蔵絵巻を中心に—　岡田三津子
素謡の場
—京観世林喜右衛門と田福・月渓—　名原　瑞恵
鷗外「半日」における《家》（上）　大谷　節子
『山ゝ本五郎左衛門只今退散仕る』論
—人物造形にみる稲垣足穂の独創性—　青田　寿美
上野本『平家物語百二十句本』の日本漢語の語彙表（下）　依藤　亜弓
発音レベルを考慮した日本語の発音指導　柏谷　嘉弘
　　安原　順子

第十二号（二〇〇一年三月）

柏谷嘉弘教授・榎坂浩尚教授退職記念号

柏谷嘉弘教授を送るにあたって　信太　知子
榎坂浩尚教授を送るにあたって　信多　純一
柏谷嘉弘教授　略歴・研究業績
榎坂浩尚教授　略歴・研究業績
『更級日記』の七夕歌　北山　円正
花の吉野
—平安末期成立の本意をめぐって—　黒田　彰子

『源平盛衰記』一字下げ記事の検討　岡田三津子
法政大学鴻山文庫蔵『勧進能発句合』翻刻と解題　大谷　節子
舞曲の物語構築手法
―「敦盛」を通して―　藤井奈都子
森鷗外『山椒大夫』依拠本
―翻刻と解説―　翻刻　中田久美子・解説　信多純一
太宰治「ろまん燈籠」の一考察
―物語の構造について―　水川布美子
音読による日本語発音指導の試み　安原　順子

第十三号（二〇〇二年三月）

菅原氏と年中行事　北山　円正
天理図書館蔵五代集歌枕注記考　黒田　彰子
『源平盛衰記』写本考㈡
―黒川本（早大書込本）の検討を通して―　岡田三津子
『奥義抄』下巻余の特立意図
―清輔歌学における口伝―　東野　泰子
『鷗外全集』第三十五巻　日記索引（人名篇）・余録　青田　寿美
句を構成する用言よりみた連体形準体法
―古代語と現代語を対照させながら―　信太　知子
音読指導による日本語音声指導の問題点とその課題
―より良い音読指導を目指して―　安原　順子

第十四号（二〇〇三年三月）

林田慎之助教授退職記念号

献辞　前田　富祺
林田慎之助教授　略歴・研究業績
井戸王小考　河田千代乃
平安時代の歌会記録　北山　円正
院政前期における歌合と万葉集　鳥井千佳子
順徳院影供百首について　黒田　彰子
浅井了意筆『源平盛衰記』の本文
―写本判定基準を活用して―　岡田三津子
『女殺油地獄』論～仏教的背景を中心に～　本田　梨恵
森志げ「波瀾」論―〈新しくない女〉の戦略―　青田　寿美
太宰治「燈籠」研究　水川布美子
井上靖「あすなろ物語」試論
―〈生と死〉を超えるもの―　芦田　栄子
新出『馬琴日記』―翻刻と解題―　信多　純一
声調語話者に共通する日本語アクセント
―タイ語話者、ベトナム語話者、広東語話者の場合―　安原　順子

第十五号（二〇〇四年三月）

伊藤教授・信多教授・濱川教授退職記念号

伊藤正義先生を送る　大谷　節子

献辞　北山　円正
濱川勝彦教授を送るにあたって　前田　富祺
伊藤・信多・濱川教授　略歴・研究業績　北山　円正
是善から道真へ―菅原氏の年中行事―　鳥井千佳子
歌合判詞の「ふるきうた」をめぐって
宴曲『究百集』の「和歌」を読む　田中　まき
―冷泉為相の八代集に関する見識を中心に―
忠度異伝歌考　岡田三津子
―花の主と人ぞ見るべき―
訂正稿 阿闍梨契沖伝漫考　信多　純一
―「塵縁出離の章」を中心に―
川端康成「青い海黒い海」考　河野　育子
太宰治「盲人独笑」試論　水川布美子
金達寿『行基の時代』における「行基」像　朴　正伊
古代語における「といふ」型名詞節について　信太　知子
―付「絶えむの心」―
資料紹介　鶴見大学蔵『才葉抄』　黒田　彰子
『和漢朗詠集』伝後京極良経筆嵯峨切「遊女」について　中川　順子
―新出資料紹介―
日本語教育と国語教育における音読指導　安原　順子

第十六号（二〇〇五年三月）

寛平期の三月三日の宴　北山　円正
川端康成「雪國」初期構想をめぐって　水川布美子
井上靖「おろしや国酔夢譚」論　芦田　栄子
語頭アクセントに注目した日本語アクセントの習得　安原　順子
―広東語話者の場合には―

第十七号（二〇〇六年三月）

子の日の行事の変遷　北山　円正
川端康成『千羽鶴』の一考察　水川布美子
衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」　信太　知子
―句構造の観点から―
アジア系学部留学生のための論文作成　安原　順子
―言語技術教育によれば―

第十八号（二〇〇七年三月）

古代語終止形の機能　信太　知子
―終止連体同形化と関連させて―
皇后と殯宮儀礼　河田千代乃
冬の菊花の詩歌　北山　円正
京観世 薗久右衛門家門人帳　解題と翻刻 附索引　大谷　節子
「細雪」と写真　安田　孝
藤村「処女地」に執筆した無名の女性達・目録　永渕　朋枝
井上靖『蒼き狼』試論　芦田　栄子
―女性不信を中心に―

『西洋紀聞』における片仮名表記の外国地名について　横田きよ子
JSPの日本語教科書作成に向けて
—英語圏の病院における日本語教育のために—　安原　順子

第十九号（二〇〇八年三月）

前田富祺教授退職記念号

前田富祺教授を送る　大谷　節子
前田富祺教授　略歴・研究業績
老鶯と鶯の老い声　北山　円正
京観世 井上次郎右衛門家（田中家引継以後）門人帳
解題と飜刻 附索引　大谷　節子
田辺聖子の戦争と文学　安田　孝
藤村「処女地」に執筆した無名の女性作家達（一）
—生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆき—　永渕　朋枝
日本近代詩史における詩集『死刑宣告』の意義　水川布美子
『雑兵物語』に用いられるベイの特徴　橋本　礼子
引用文誘導句のの変遷
—連体形準体法と関連させて—　信太　知子
近世料理書におけるイリツケルについて　余田　弘美
服装語彙から見た婦人雑誌の性格
—昭和二四年の雑誌を資料として—　岡田由紀子
二大学間における双方向授業の試み　安原　順子

第二十号（二〇〇九年三月）

五月五日とあやめ草　北山　円正
藤村「処女地」に執筆した女性作家達（二）
—加藤みどり、島崎静子、鷹野つぎ、若杉鳥子—　永渕　朋枝
美味・美景・美女の理想郷
—谷崎潤一郎における「中国江南」—　李　雁南
丹羽文雄『親鸞』における信心の形成
—「越後時代」を中心に—　濱川　勝彦
松江藩松平家の鷹書　三保　忠夫
二大学間における双方向授業の効果と問題点
—平成20年度の双方向授業から—　安原　順子

第二十一号（二〇一〇年三月）

明代日用類書における助数詞（量詞）
—日本語助数詞研究のために—　三保　忠夫
「西光寺縁起」二種　—解説と翻刻—　阪口　弘之・槇　記代美
藤村「処女地」に執筆した無名の女性作家達（三）
—細川武子、辻村乙未、若山喜志子—　永渕　朋枝
谷崎潤一郎「痴人の愛」論
—もう一人の「痴人」—　髙田　絵莉
二大学間における双方向授業とその効果
—平成21年度の双方向授業から—　安原　順子

第二十二号（二〇二年三月）

『枕草子』の「犬島」の位置
―『和泉往来』の「犬嶋」を手掛かりとして―　北山　円正

下掛り謡本における大夫系節付の特徴
―ゴマ点の用法を中心に―　松居　郁子

百姓狂言におけるめでたさ
―狂言「餅酒」を通して―　石川　泰菜

藤村「処女地」の執筆者
―補遺、素川絹子―　永渕　朋枝

松江藩松平家と公儀鷹匠・鷹匠同心
―宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究―　三保　忠夫

カジュアルスタイルにおける方言切替え
―形式の受容と切換えの要因―　舩木　礼子

第二十三号（二〇二三年三月）

『土左日記』の「手取り交はして」
―神仙譚の受容について―　北山　円正

下掛り謡本における大夫系節付の問題
―成立時期とその背景―　松居　郁子

執筆目録―細川武子、正宗乙未、島崎静子―　永渕　朋枝

野上彌生子と美濃部民子の交遊
―『野上彌生子全集』未収書簡より―（一）　田中由美子

公儀鷹匠同心片山賢の文筆活動について
―宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究―　三保　忠夫

異文化間における学生の気づきと双方向授業
―reflective journalの質的分析による試みから―　安原　順子

第二十四号（二〇二三年三月）

阪口弘之教授退職記念号

阪口弘之先生を送る　大谷　節子

阪口弘之教授　略歴・研究業績　北山　円正

大江匡衡の八月十五夜の詩　大谷　節子

『改正段々壊』解題と飜刻　大山　範子

謡曲《休天神》考

古浄瑠璃〔紀三井寺（きみいでらのゆらひこ）（せんあくげんざいちごく）〕（六段本）解題と翻刻　川端　咲子

寛永期浄瑠璃の手法
―『とうだいき』を例として―　槇　記代美

『藤村全集』の訂正と書誌的問題点　永渕　朋枝

『乱菊物語』の裏表　安田　孝

一橋家鷹匠原田三野右衛門とその鷹書
―宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究―　三保　忠夫

動詞の否定中止形ナクの使用状況と成立背景　舩木　礼子（橋本　礼子）

異文化間における学生の気づきを重視した双方向授業
―平成24年度のreflective journalの質的分析から―　安原　順子

第二十五号（二〇一四年三月）

「琵琶行」受容の一斑
—『権記』正暦五年八月の記事から—　北山　円正

浄瑠璃『三世相』における工夫　川端　咲子

李瑢撰『古本鷹鶻方』・李爛撰『新増鷹鶻方』について
—宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究—　三保　忠夫

山口東部方言における条件表現形式「ト」　舩木　礼子（橋本　礼子）

学生の気づきを重視した「生活者としての外国人」への日本語指導の試み　安原　順子

第二十六号（二〇一五年三月）

『平家物語』大宰府落と漢詩文
—王昭君説話などの利用について—　北山　円正

藤村発行「処女地」に執筆した〈無名〉の女性達
—伊東英子・林真珠—　永渕　朋枝

西下する鷹匠、児玉経平・斎藤経平・板垣経平・熊谷経平
—宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究—　三保　忠夫

学習指導要領と中学校国語教科書における「方言と共通語」の扱い
—教材の内容に注目して—　舩木　礼子（橋本　礼子）

eポートフォリオと日本語教員養成　安原　順子

第二十七号（二〇一六年三月）

河田千代乃教授・三保忠夫教授退職記念号

献辞　北山　円正

三保忠夫教授を送るにあたって　橋本　礼子

河田千代乃教授　略歴・研究業績

三保忠夫教授　略歴・研究業績

大江匡衡の大井河舟遊和歌　北山　円正

奥浄瑠璃本の依拠本としての六段本
—佐藤理作（利作）旧蔵書から—　井上　勝志

藤村発行「処女地」に執筆した織田やす
—覚醒婦人協会との関わり—　永渕　朋枝

丹羽文雄「現代史」の一考察　水川布美子

鷹山の言葉（鷹狩言葉）について
—宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究—　三保　忠夫

方言のとりたて助詞の使用傾向
—大阪方言・京都方言の限定のとりたて表現に注目して—　舩木　礼子（橋本　礼子）

日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業
—H27年度のreflective journalの分析から—　安原　順子

第二十八号（二〇一七年三月）

『萬葉』詠歌の地・巨勢山と真土山
—知られざる初期萬葉の道—　丸山　顯徳

『伊勢集』龍門寺詠注解　北山　円正
観世信光作〈盛長〉について　樹下　文隆
食満南北脚色、浄瑠璃「恩讐の彼方に」について　川端　咲子
藤村『新生』を読む〈一般の読者〉
―新聞連載の「告白小説」―　永渕　朋枝
日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業プログラム
―現状と問題点―　安原　順子
中土佐町久礼方言の条件表現体系
―バ融合形の用法を中心に―　舩木　礼子（橋本　礼子）

第二十九号（二〇一八年三月）

寛平期の年中行事の一面　北山　円正
《松風》から《熊野》へ
―禅竹の「春の曙・秋の夕暮」説をめぐって―　樹下　文隆
『傾城酒呑童子』の構造と趣向　井上　勝志
近世芸能における道成寺の演出
―宇治加賀掾古浄瑠璃『うしわか虎之巻』鐘入を中心に―　川端　咲子
日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業プログラム
―平成二十九年度の報告―　安原　順子
石見方言・長門方言における推量表現形式「ロー」の使用状況　舩木　礼子（橋本　礼子）
Basil Hall Chamberlainとその時代　岡墻　裕剛

第三十号（二〇一九年三月）

『平家物語』忠度都落の表現
―漢詩文の受容をめぐって―　北山　円正
宇治加賀掾正本『難波役者評判』覚書　井上　勝志
『後の新片町より』における藤村初期随筆の確立
―初出と校異から―　永渕　朋枝
丹羽文雄「厭がらせの年齢」の一考察
―社会的背景を踏まえて―　水川布美子
日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業プログラム
―平成30年度の報告と学習者オートノミーの構築―　安原　順子
大分方言のとりたて形式「ンジョー」の意味・機能
―昔話・民話を資料として　舩木　礼子（橋本　礼子）
Isemonger(1929) The elements of Japanese writing について　岡墻　裕剛
神女大国文 論文総目録（創刊号～第三十号）

国文学会だより

平成三十年度国文学会総会

平成三十年十一月二十二日（木）　於 図書館AVホール

プログラム

（1）総会　平成二十九年度事業報告

平成三十年度事業計画

平成三十年度事業中間報告

（2）公開講演会

「すま」はどう書かれるか　岡墻　裕剛准教授

文学散歩

平成三十年十一月二十五日（土）

「須磨の歴史と文学に触れる」

行程　須磨離宮公園→松風村雨堂→菅ノ井→須磨寺→源光寺→関守稲荷→村上帝社

文楽鑑賞会

平成三十年六月十六日（土）・十七日（日）　於 国立文楽劇場

演目　「二人三番叟」「絵本太功記」（夕顔棚の段・尼ヶ崎の段）

解説　「文楽へようこそ」

能楽鑑賞会

平成三十年六月十七日（日）　照の会　於 湊川神社神能殿

演目　能　「盛久」「善界」

狂言　「瓜盗人」

平成三十年十月二十七日（土）　観正会定式能　於 上田観正会能楽堂

演目　能　「俊寛」「羽衣」「田村」

狂言　「栗焼」

『神女大国文』第三十号発行

平成三十一年三月十五日

平成三十年度開講科目

［学　部］

日本文学概論Ⅰ・Ⅱ　樹下　文隆・井上　勝志
日本語学概論Ⅰ・Ⅱ　岡墻　裕剛
日本文学史Ⅰ・Ⅱ　北山　円正
日本文学史Ⅲ・Ⅳ　永渕　朋枝
基礎演習　井上　勝志・北山　円正
日本語文法Ⅰ・Ⅱ　永渕　朋枝・橋本　礼子
日本語日本文学入門Ⅰ　安原　順子
日本語日本文学入門Ⅱ　岡墻　裕剛・橋本　礼子
古典文学講読Ⅰ・Ⅱ　井上　勝志・大山　範子
古典芸能講読Ⅰ・Ⅱ　永渕　朋枝・橋本　礼子
芸能史Ⅰ・Ⅱ　井上　勝志・樹下　文隆
近現代文学講読Ⅰ・Ⅱ　樹下　文隆・井上　勝志
日本語史Ⅰ・Ⅱ　水川布美子
日本語学講読Ⅰ・Ⅱ　岡墻　裕剛
近現代文学特講Ⅰ・Ⅱ　山口　真輝
古典文学特講Ⅰ・Ⅱ　三嶋　潤子
古典芸能特講Ⅰ・Ⅱ　大山　範子
社会言語学　井上　勝志・樹下　文隆
コミュニケーション特講Ⅰ・Ⅱ　橋本　礼子
日本語日本文学演習Ⅰ　北川　勝利・岡墻　裕剛
　　岡墻　裕剛・北山　円正
　　樹下　文隆・永渕　朋枝
　　橋本　礼子
日本語日本文学演習Ⅱ　井上　勝志・岡墻　裕剛
中国文学講読Ⅰ・Ⅱ　北山　円正・樹下　文隆
中国文学史Ⅰ・Ⅱ　永渕　朋枝・橋本　礼子
民俗文化史Ⅰ・Ⅱ　安原　順子
文献資料学　上原　尉暢
国語科指導法Ⅰ・Ⅱ　上原　尉暢
国語科指導法Ⅲ・Ⅳ　橋本　章彦
書道　川端　咲子
日本語教育特講Ⅰ・Ⅱ　島田　哲朗
日本語教授法Ⅰ　堀江　祐爾
日本語教授法Ⅱ　古溝　茂
言語学概論Ⅰ・Ⅱ　安原　順子
日本語実習　堀　勝博
卒業論文　岡田由紀子・安原　順子
　　堀　勝博
　　安原　順子

［大学院］

日本文学特論Ⅰ　北山　円正
日本文学特論Ⅱ　樹下　文隆
日本文学特論Ⅲ　井上　勝志
日本文学特論Ⅴ　永渕　朋枝
日本語学特論Ⅰ　安原　順子
日本語学特論Ⅱ　橋本　礼子
日本文学演習Ⅰ　北山　円正
日本文学演習Ⅱ　樹下　文隆
日本文学演習Ⅲ　井上　勝志
日本文学演習Ⅴ　永渕　朋枝

日本語学演習Ⅰ　安原　順子
日本語学演習Ⅱ　橋本　礼子
論文指導演習

卒業論文題目

Aクラス

キャッチコピーにおける言語選択
——女性用ランジェリーを中心に——　浅田　真維
淡路人形浄瑠璃及び淡路だんじり唄の後継者問題
——南あわじ市の中学生を対象に——　阿部　加奈
商品名の語彙的特徴
——アイメイク化粧品を対象に——　天野　永理
『天守物語』——桃と秋——　新井　栞里
感謝場面における言葉の選択
——「ありがとう」と「すみません」——　岩本　美奈
信田妻系の作品の比較と変移　大塚茉里奈
鳥獣人物戯画の使用例について　大山沙悠里
漫才における「笑い」のメカニズム
——ダブルボケの漫才について——　沖村みちる
山上憶良による万葉仮名「き」について　小口　奏美
国内カルチャー・ショックの現状について　嘉住　五月
『古今和歌集』におけるほととぎすの役割について　北口　央佳
ものがたりにおける蛇のイメージ
——陰と陽の姿——　熊澤　知華
芥川龍之介「秋」論　黒田　知穂
動物のオノマトペについて
——アンケート調査をもとに——　小出　未波
谷崎潤一郎『痴人の愛』論　小齋　里旺
平安文学における桃について　児玉　春奈
発話に伴うジェスチャーの研究　斎藤　梨香
原作と改作の違い
——『浄瑠璃御前物語』と『牛王の姫』『ふくろう』——　酒井　祐実
石・木材店の看板における「材」字体について　坂本　杏奈
名字「しばさき」の地域的分布について　柴崎　彩香
夏目漱石『こころ』論　高畠明日香
「顔面蒼白」という語の定着について　高村　真弥
遠近法から見る浮世絵と西洋画の関係性　田口　静希
有島武郎『カインの末裔』論
——「妻」の存在が象徴するものとは——　竹村佐和子
谷崎潤一郎『刺青』論　寺本莉奈子

Bクラス

スーパーの従業員の客に対する挨拶について
——店ごとに挨拶が違う原因追求と指導方法について——　田中万利渚
「めっちゃ」について　田邊　初菜
日本の文化史における子どもの遊びについて
——狂言「いろは」と現代の漫画を中心に——　津名あかね
明石の君と松
——明石・松風巻より——　常富　一沙
志賀直哉『城の崎にて』論　寺田　楓華

字幕表記における異文化背景の消失
——洋画における日本語字幕の翻訳を対象に——　中野　結希
漫画『ONE PIECE』における音喩の研究　夏山　美苗
『石山寺開帳』の魅力
——『江州石山寺源氏供養』との比較を通して——　西本　理恵
化粧にまつわる俳句
——「鳳仙花」「爪紅」を巡って——　早川　南
第三者から既婚男性に対する〝夫さん〟の呼称について　林　真衣
片づけに焦点を当てた子どもへの言葉がけについて
——学童期の子どもと幼児期の子どもを比較して——　張　歩実
ボーイズラブ作品における文末表現について　伴野　友希
江戸川乱歩『押絵と旅する男』における
オノマトペのカタカナ表記について　福間日向子
かぐや姫の変遷　藤澤　江利
川端康成『伊豆の踊子』論　藤本　莉央
梶井基次郎「檸檬」論
——「不吉な塊」についての考察——　松井百合花
桐壺帝の決断　松本　真由
『田園の憂鬱』論　——「彼」の描かれ方——　宮本　真佑
『銀河鉄道の夜』児童文学としての構造　村上　結郁
お夏清十郎と姫路　八木　菜月
一〇代女性向けのファッション雑誌における、言語の省略
——『Seventeen』を対象として——　山内　優里
花散里という女性
——「橘」「ほととぎす」「五月雨」から——　山口　瑞葉
中学校における詩の授業について　山本　海里
金平浄瑠璃における八幡神の描写　渡邉真紀子
『広辞苑』から見る日本語の変遷について　渡辺　由紀
「半端ない」について　前田　唯

執筆者紹介

北山　円正	本学教授
井上　勝志	本学教授
永渕　朋枝	本学教授
水川布美子	本学非常勤講師
安原　順子	本学教授
舩木　礼子（橋本　礼子）	本学准教授
岡墻　裕剛	本学准教授

編集後記

本年度、本誌は第三十号を迎えた。創刊は平成元（一九八九）年度であるから、この年号とともに歩みを続けてきたことになる。本学科の前身文学部文学科国文学専攻の創設が昭和四十四（一九六九）年四月であり、その二十年後に学会誌を持つに至った。大学院日本文学専攻（博士前期課程）を昭和六十一年に創設し、さらに博士後期課程を設立する（平成五年）機運の起こっていた時期である。大学院を持つのであれば、国文学会とともに学会誌も必要であるとの見識を有していたことの現れである。

全国の日本文学・日本語学学科を見渡すと、大学の学部・学科改編、人文学軽視の風潮による志望学生の減少等々の事情によって、学会の雑誌を発行廃刊したところも多い。もとより本誌の置かれた状況も安穏としていられるものではない。

発刊に尽力された石原清志先生の「創刊のことば」には、「我々はこの機関誌を守り、育てて、行く行くは国文学界の勝れた学会誌に育てようと念願しています」とある。この「ことば」から始まり、第三十号の区切りを迎えたところで、これまでの歩みを振り返る意味を込めて、論文の総目録を載せた。通覧してゆくと、その分野を代表する方たちが力編を寄せておられるし、大学院生の論考も勝れたものの多いことが分かる。投稿者一人一人の真摯で熱意あふれる論文が本誌を支えてきた。間もなく公表される年号とともに、一歩ずつ進みたいと思う。

（北山円正）

題字は故行吉哉女先生

平成三十一年三月一日印刷
平成三十一年三月十五日発行

『神女大国文』第三十号

編集者　神戸女子大学国文学会
　　会長　北山円正

発行所　神戸女子大学国文学会
　　神戸市須磨区東須磨青山二―一
　　電話（〇七八）七三一―四四一六㈹

印刷所　菱三印刷株式会社
　　神戸市兵庫区大開通二―二―一一
　　電話（〇七八）五七六―三九六一